YAMAJU-SETSUBI クロニクル

年 代 記

創業から今日に至るまで、数々の試練を乗り越えてきた山住設備。初代社長の創業秘話からはじまる50年の歴史をたどっていきます。

1960年代（創業前）

豊田自動車（株）本社経営幹部と佐藤蒼吉（後列右から2番目）

「創業秘話」創業者 佐藤 蒼吉の決意と志

高度成長期の自動車販売業における商いは、現代とは異なり自動車の装備品も乏しく本体のみを販売することが常でした。今では自動車を購入すれば標準品として装備されるカーラジオやエアコンですら、お客様の要望を受けて取り付け、販売する時代です。山形トヨタ自動車部品部の取締役部長として腕をふるっていた佐藤蒼吉は、ナショナルのトランジスタラジオの秀逸さに惚れ込み営業・販売に力を注ぎ、その甲斐あって蒼吉以下部品部スタッフのカーラジオにおける取引数は相当量を超えるようになっていました。

その様子を見ていた山形ナショナル株式会社　専務取締役の宮田和夫氏より「車の販売も頭打ちだ。こういったカーラジオやエアコンは将来標準装備となるはず。これからは住宅ラッシュが絶対に来るので独立して、ナショナルの住宅家電販売店の山形第一号店になってみてはいかがでしょうか?」という言葉が、後に山形住宅設備の創業を決意するにいたる契機となります。

この数年前に蒼吉は最愛の長男（当時中学3年生）を突然に亡くし、失意のうちにいましたが、宮田専務のこの言葉が蒼吉を奮い立たせて明るい希望を与え、心の支えとなっていきます。また、蒼吉は行く末を心配した（障害を持つ）次男のためにも会社を始めて、働く機会を与えたいという気持ちも相まって山形トヨタ自動車販売の初代社長　鈴木吉助氏に対してついに胸の内の高い志を話します。鈴木社長の「頑張ってみろ!」という激励の後押しの言葉で決心を決めて、蒼吉は山形トヨタ自動車部品部の部下を引き連れて創業。1969年にこのメンバーが山形ナショナルにて研修を開始して翌1970年2月18日晴れて山形住宅設備株式会社の設立にいたります。世の中では大阪万博が開催されるなど明るい未来・夢に向かって日本が走ろうとしていた時代でした。

創業当初の山形住宅設備（旅籠町）

創業当初の社員

1970年代

昭和51年1月6日、初売り

「七人の侍」侍の魂と設備への挑戦

佐藤蒼吉をはじめとする佐藤・鎌上・遠藤・鈴木・寺崎・高橋の7人は、山形ナショナルにて一抹の不安を感じつつも開店を夢見て必死に研修を積みました。この7人の仕事ぶりに対して、受け入れ側の山形ナショナルの社員の皆様からは、知らない間に「七人の侍」と呼ばれるようにまでなっていたのです。

住宅設備の素人集団ではあるものの、営業マンが5人と営業・販売に長けたメンバーが集結していました。当時20万円もした電子レンジの年間売り上げ台数が、販売店日本一となり、後に東北地区の「ナショナル住専店」として感謝状を頂くまでに成長を遂げることとなります。

一方で設備工事においてはまったくの素人集団であったメンバー。掘削作業は剣スコップ一丁が半月で丸スコップになる状態で、土木業者の作業員からはよく笑われるほど・・・。しかしながら当時山形市内では珍しく重機を早期に取り入れるなど積極的に設備投資にも力を注ぎます。まさにこの「七人の侍」が山住設備の精神面の「礎」を築いたと言えるでしょう。

東北地区の「ナショナル住専店」として感謝状を頂く

Back to the 70's

当時の思い出

元常務取締役
寺崎 巌

佐藤社長の高い志をずっと忘れずに

1年間山形ナショナルへ出向し、住宅設備（配管・設備）の勉強をさせていただきました。その甲斐あって、2年目からはセントラルヒーティングの配管ができるようになり、オースターを使ってのセントラルヒーティングの設備配管も山形市内では先駆けの方だったと思います。山住設備株式会社を退社するまで、協力業者の方々に多大なお力をいただき頑張ってきました。50周年おめでとうございます。創業当初の佐藤社長の高い志を忘れず、これからも地域に根ざしたお客様に愛される会社に成長して欲しいと願ってやみません。

1980～90年代

「苦難と成長」不遇を乗り越え平成の世に

旅篭町にてスタートした会社の社屋は賃貸でした。開店後7年経った1977年に山形市下条地内へ移転。創業当初より資金繰りは大変で、月末になると蒼吉自らが大工さん宅を飛び回って頭を下げて集金に行くことも少なくなかったようです。

1980年代に入り山形住宅設備株式会社に思わぬ事態が起こります。専務取締役として蒼吉とともに会社を支えていた鷲和夫が肝炎を発症して病院に緊急搬送され、さらに同時期に取引先の倒産による多額の不良債権が発生するなど不遇が重なり、自力での再生は困難な状態に陥りました。

蒼吉はナショナル西店会で会長、副会長の懇意な間柄であった当時の東北電化工業株式会社　専務取締役（現　同社　代表取締役会長）の會津久治郎氏に再建の支援をお願いして1983年に東北電化グループに加入。その後は東北電化工業株式会社の敷地内にプレハブ社屋を新築して移転。この地で再建を目指すこととなりました。

再建に向けて役職員が一丸となって努力する一方、病状が落ち着き会社に復帰した鷲和夫専務を中心に髙梨、井上といった若い社員と力を合わせて、住宅設備工事のみならず水道本管工事や機械設備工事にも果敢に挑戦。順調に売上を伸ばし、平成の世となった1990年に社名を「山形住宅設備株式会社」から「山住設備株式会社」に改称しました。そして、現在の山形市中桜田地内にて念願の自社所有の敷地と建物を手に入れることができました。後に蒼吉は社長職を鷲和夫に譲り自らは会長職に就任。新天地にて新たな体制で「山住設備株式会社」がスタートして、現在にいたります。

昭和58年、東北電化グループに

在りし日の佐藤蒼吉会長

二代目鷲和夫社長

1983年、東北電化工業敷地内に移転

＜お話をうかがった 方々＞

- 東北電化工業株式会社　代表取締役会長　會津 久治郎 様
- 山形パナソニック株式会社　元 専務取締役　渡辺 稔 様
- 山住設備株式会社　元 常務取締役　寺崎 巌 様

Back to the 80's　当時の思い出

昭和48年入社
佐藤　功

苦労も多かった、手作業の工事

旅籠町～下条～青田～中桜田の4つの事務所を経験しました。当時は排水管・水道管の埋設はツルハシとスコップ、残土運搬は、トラックに手積み手降ろしでした。入社当初は山形住宅設備に、小型重機がまだありませんでした。そのため、給水管の分岐工事の時などは、役所の方が穿孔作業をできるよう、分岐箇所を時間までに綺麗に掘り上げておかなければならず、朝から大変でした（出来ていなければ、役所の方が怒って帰ってしまう時代でした）。昭和50年代は住宅ラッシュで、住宅の設備配管も大変でした。大工さん（棟梁）が一番偉く、打ち合わせをしても全く聞いてもらえず、大変な思いをしました。よく我慢できたと思っています。最後に佐藤蒼吉さんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

2000～2020年代

より地域に密着した技術サービスの企業として飛躍

1999年10月、資本金を500万円から2000万円に増資し、山住設備は業務拡大に向けて走り出します。2000年3月に管工事特定建設業許可を取得。2004年7月には機械器具設置工事業建設業許可を取得しました。そんな中、2004年4月16日に鷲社長が急逝。急遽、齋藤取締役が3代目社長に就任することが決まります。リーマンショックに起因する急激な景気後退、東日本大震災による人的物的な甚大な損失といった出来事が相次ぎ、厳しい局面も迎えることがありましたが、齋藤社長は、顧客満足度を高めるには「技術力の向上」と「働きやすい環境づくり」が不可欠であるとの考えを貫き、新たな挑戦を志します。

仕事の少ない1月2月は一軒一軒家庭を回り修理や修繕の工事をお客様からいただく旧来の伝統である営業手法を実践。今では山形市内の南部を中心に1000所帯を超える家庭が顧客となりました。公共工事においては、山形市をはじめとする村山地区の4市5町、山形県や国の12省庁、その他関係団体など多岐にわたり、施工実績は東北・全国へ広がり、着々と業績を増やしていきます。

また、やる気のある未経験者や素人に近い技術者を積極的に採用して教育を施し、盤石な技術集団を育成。技能五輪全国大会出場を目指す若い社員も増えています。2011年からはお客様とのコミュニケーションツールとして会報誌「Story's」を発行。内外への情報発信にも力を入れ始めました。

2010年の40周年、2015年の45周年には盛大な感謝祭を開催。お客様やお取引企業様との親睦を深めました。2019年になると令山会が発足。山住設備と施工協力会社との間で強い絆が結ばれました。

そして2020年、山住設備は設立50周年を迎えます。2月22日に記念式典を挙行。社員全員が出席し、お客様や協力会社への日頃の感謝の意を伝える絶好の機会となりました。今日の成長を遂げた「山住設備株式会社」の姿は、創業当初の素人集団「七人の侍」の創りあげた「礎」があるからこそなのです。

2010年40周年記念大感謝祭

2015年45周年記念大感謝祭

45周年大感謝祭での社長挨拶

子どもに大好評だった重機体験

復興支援の出発式（宮城県角田市へ）

宮崎遠征（2020年）

Back to the 2010's　当時の思い出

平成20年入社
水戸部　聡

糧となった大震災の復旧工事

入社当初は、設備の知識が浅く困難の連続でしたが先輩方に支えられ成長することができました。心に深く残っているのは2011年3月11日の東日本大震災です。人生で初めて経験する揺れと、TVから流れる各県の被災情報。大きなショックと悲しみに打ちひしがれました。そんな中、緊急支援活動に山形市管工事組合員の一員として参加できたことが今でも心に残っています。浄水場に絡むメインの水道管を、チームワークとこれまで培った技術を出し合い迅速に対応できたことは貴重な経験であり、私の財産です。今は新型コロナウイルスで大変な時期ですが、早く終息し平和な日常が戻る事を願いつつ、今後も「困難への挑戦と技術の錬磨」で成長していきたいと思います。